

姫路城城下町跡

- 姫路城跡第302・308・312次発掘調査報告書 -



平成25年(2013年)

姫路市教育委員会

1. 調査に至る経緯と調査の位置

兵庫県姫路市駅前町241番地において、姫路駅前商店街のアーケード改修が計画された。一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地の姫路城城下町跡である（図7）。『姫路城跡（城郭図）』（図8、以下「絵図」という。）によると、当該地は城下町南端に位置し、武家屋敷、下屋敷、街路、土塁及び外堀に該当する。

姫路駅前商店街は、その北隣にある姫路みゆき通り商店街とともに「みゆき通り」の名称で親しまれているが、この名称の歴史は古く明治までさかのぼる。城下町から軍都へと大きく変貌した姫路では、明治36年、陸軍特別大演習が挙行され、明治天皇による城北練兵場（現姫路競馬場周辺）観兵式行幸のため、姫路駅から城南練兵場（現大手前公園周辺）に向かう直線道路が新設された。これが、「御幸通り」の由来となったという（高橋1974）。その後すぐに旅館や商店などが進出し、少なくとも大正6年頃には日除け天幕開閉式のアーケードが設置され（高橋1970）、現在の姿が形成され始めていたようである。

今回のアーケード改修工事では、既存の基礎と重複しない新設の基礎、電線等の埋設管等を一時迂回するための仮設柱などの工事箇所（図1）を対象に、記録保存のための本発掘調査を行った。調査は、店舗の閉店後に行われた工事等にあわせて概ね夜間に実施した。

2. 調査の結果

調査区1（図2） 現地表下約1.7mで、断面L字を呈する切石の構造物を検出した。平坦面を上に向けた石敷きと、その南端の調査区南壁からほぼ垂直に立ち上がる布積みの石組みで構成される。石敷きから石組みの立ち上がりの間約60cmには、水流に起因すると思われる砂層が堆積していることから、水路と考えられる。遺物は出土しなかったが、石材の形態や積み方から近代の遺構である可能性が高い。絵図では土塁の想定部に該当している。

調査区2（図3） 現地表下約75cmで間知石の後端部を北に向けた2石と多数の円礫を検出した。調査区が狭小で精査は困難であったが、西壁において黄褐色砂疊の地山とその直上の3層からなる整地層と思われる土層、整地層を切り込むラインを確認した。このラインは、石材の検出状況等から、外堀の北側石垣の掘方と考えられ、後に石垣の築石が間知石に入れ替えられたものであろう。絵図上の想定位置からは10mほど南へずれることになる。遺物は出土しなかった。

ここで再び調査区1に戻り、絵図上の土塁の位置が調査区2と同様、南へ10m程ずれていますとすると、L字状構造物が土塁北側の法尻付近に該当することがわかる。近代に入って、土塁を解体した後に石組み水路を新設した可能性も否めないものの、外堀の土塁北側にあった石組み溝を改修したと考えの方がより妥当性が高いといえよう。このように想定すると、同地点から東西へ延びる商店街の小路がその名残をとどめているようにも見える。

調査区3・4（図4・5） 調査区3では南に面を持つ切石の構造物を確認した。既設管路の掘方による削平を受けており、石材は3石が残存していた。調査区4の西壁では、面を上に向けた間知石4石とその両側に面を垂直にした間知石を2石検出した。これらの石材は外堀の埋土と考えられる粘土層の上に構築されていたことから、明治・大正年間に外堀の一部を埋戻した際（橋本1982）に構築されたものと考えられる。

調査区5（図6） 外堀以南に位置する。旧耕作土、にぶい黄褐色シルト及び暗緑灰色砂疊を確認した。この旧耕作土は駅前町遺跡（図7）で既に確認されている近世の耕作土（秋枝・中川2000他）と一連のものと想定できる。後二者は地山で、良好な残存状況を示していた。

今回の調査で検出した石の構造物等については、調査区2の掘方ラインを除き、近代以降のものである可能性が高く、外堀には直接関連しないとも考えられる。しかし、近代以降の外堀や土塁の変遷をたどる近代遺跡として、解体調査等を行わず現状保存とした。また、個別に図等で提示しなかったものの、土層の堆積状況から近世のものと思われる遺構埋土等を確認した調査地点も多い。

3.まとめ

絵図で想定されていた外堀及び土塁の位置は、調査区1・2で確認した構造物などから、10m程度南にずれ、城下町の範囲がさらに南まで広がっていたと考えられる。中心市街地に位置する姫路城城下町跡では、これまでに行われてきた発掘調査等で、高層の建物を除けば遺構が良好に残っていることがわかってきてている。今回の調査では、狹小な調査区のために、精査は困難を極めたが、商店街の地下でも遺構が良好に保存されていることが改めて確認できた。

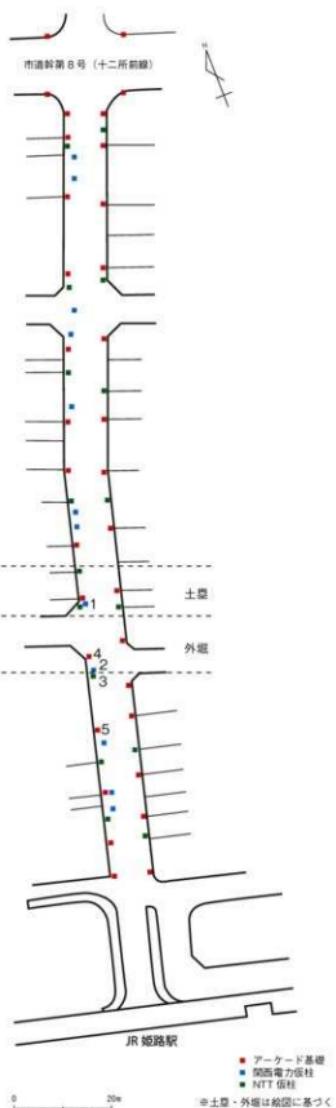


図1 調査区配置図



図2 調査区1



図3 調査区2



図4 調査区3



図5 調査区4

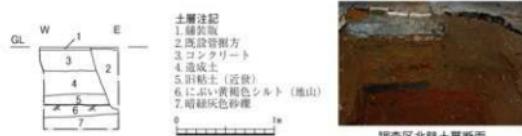


図6 調査区5



- 特別史跡姫路城跡
- 姫路城城下町跡
- 本町遺跡
- 富士才遺跡
- 野里門下層遺跡
- 東山焼窑跡
- 御茶屋町遺跡
- 八代深田遺跡
- 岩瀬町遺跡
- 名古山遺跡
- 千代田遺跡
- 南歛町遺跡
- 豆腐町遺跡
- 駅前町遺跡
- 神屋町遺跡

図7 関辺の遺跡



*「姫路侍屋敷図」(文化13年(1816)以前)と市街地図を合成した「姫路城跡(城郭図)」に加筆

図 8 調査地の位置

報告書抄録								
ふりがな	ひめじょうじょうかまちあと							
書名	姫路城下町跡							
副書名	姫路城跡第302・308・312次発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	大谷 輝彦 福井 優							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1				TEL (079) 252-3950			
発行年月日	平成26年(2014年)3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
姫路城下町跡	兵庫県姫路市 駅前町241-337、 232-314番地先	市町村	遺跡番号	34°	134°	2013.7.11	-	アーケード改修
		28201	020169	49°	41°	~		
				43°	29°	2014.2.24		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			遺跡調査番号	
姫路城下町跡	集落跡	江戸時代 (近代を含む)	石垣、外堀、石組み溝	なし			20130150	
							20130182	
							20130390	

— 例 言 —

- 1) 香川は「那智勝浦町道規則第34号」、237、238-241番地に位置する那智勝浦町立那智勝浦幼稚園である。
2) 沢田義典は、「那智勝浦町道規則第34号」(原書名: 松井義典著)からの委託を受け、那智在教育委員会が実施した。
3) 佐藤義典は「那智勝浦町道規則第34号」(原書名: 松井義典著)、2013年02月、2013年02月、2013年03月の、那智勝浦町文化センター久谷桜屋、福井屋が担当した。
著作権者は那智勝浦町文化センターで行った。
4) 7巻は、国土理政文庫の25万冊の1位札標「那智北山」、「那智南面」を使用した。
5) 上巻の題名は、「那智勝浦町道規則第34号」(原書名: 松井義典著)に準拠した。
6) 7巻の書名は、「那智・福井屋」が付いた。
7) お問い合わせください。那智勝浦町道規則第34号文化センターに保留している。
8) 那智の町は、現在の那智勝浦町道規則第34号の路線図に向って描画したものである(昭和20年版)。写真は那智メタ商店所蔵。読み取ることは、那智メタ商店にてご確認ください。
9) 那智の町は、現在の那智勝浦町道規則第34号の路線図に向って描画したものである(昭和20年版)。写真は那智メタ商店所蔵。読み取ることは、那智メタ商店にてご確認ください。
10) お手本を用意するにあたり、以下の参考文献を参考、参考書にした。
『那智北山』(那智勝浦町編)、「下巻」名古屋市、青柳商店 1973年(昭和48年)那智の郷都路「那智勝浦町会議事録」那智勝浦町会議事録会員会編1990「那智勝浦」、那智勝浦・加茂 1988「那智勝浦町の歴史と覚書」那智勝浦町会議事録会員会編1994「那智勝浦」、那智勝浦・秋葉川 2000「那智勝浦」(原題: 那智勝浦町会議事録)4巻(第1巻)、小笠原子編著「TSUBOKUCHI」平成21年度(1999)那智勝浦町文化財調査報告書、那智勝浦町会議事録(監修)2005「那智勝浦・那智勝浦今昔写真集」株式会社郷土出版部、那智勝浦町文化財調査報告書、那智勝浦町会議事録(監修)2008「那智勝浦・ふるさと記念写真集」株式会社郷土出版。

而當初的夢幻色彩已消失，還有幾句詩，彷彿是

姫路市蔵蔵文化財センター調査報告 第23集

編 告 郵路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市西四郷町坂元 414番地1
発 行 郵路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地
発行日 平成26年(2014年)3月31日
印刷・製本 丸山印刷株式会社
〒676-8566 兵庫県高砂市神爪1丁目11番33号